

第70歩

「大島を未来へつなぐ会」

瀬戸内海に浮かび、今もなお白砂青松が美しい大島は、国立ハンセン病療養所・大島青松園を擁し、全国13カ所ある療養所の中で唯一離島にある特別な存在です。長く続いたハンセン病の隔離政策の下で、ここには多くの人生と記憶が積み重ねられており、語り継がれるべき痛みと誇りが刻まれています。しかし、入所者の高齢化が進み、今では入所者は29名に減少し、平均年齢も88歳を超えていました（令和8年1月1日現在）。青松園と入所者にとって、時間はなくなりつつあるのです。なのに、大島の将来構想は、いまだに描かれておりません。国が誤ったハンセン病の隔離政策でいわばずっと閉ざされていた大島は、平成22年から始まった瀬戸内国際芸術祭の会場の一つになり、多くの人が訪れる交流の島となりました。そんな中、本市では、平成26年に「大島振興方策」を作り、大島を離島振興法の対象として、港の改築やサマースクールの実施など、ハード、ソフトのさまざまな事業を実施してまいりました。それから10年余り。さらに大島を未来へとつなぐために入所者を含む関係者で構成する「大島を未来へつなぐ会」を立ち上げ、昨年12月に第1回会合を開きました。その時の挨拶で特別参与の北川フラムさんが将来への鍵とされたのが「アート」と「子ども」というワードでした。アートは、言葉では伝えきれない歴史や感情を共有し、世代や立場の違いを越えて人と人を結びます。そして、子どもたちは未来そのものです。子どもたちが大島を訪れ、学び、感じ、表現する体験は、過去の歴史を「重いもの」としてではなく、「自分たちの社会を考える問い」として受け止める力を育てることでしょう。

入所者の方々の願いは、第一に自分たちがいなくなった後もこの大島に多くの人が出入りし交流する島であってほしいということです。そのような入所者の方々の心に寄り添いながら、大島および青松園の将来像を描いていければ、と思っています。アートと子どもの力を通して、この島を未来へとつなげてまいりたいと思います。

